17　日本における芸用解剖学の受容

寺畑喜朔

わが国の古寺の門前に立つと、躍動感あふれる二王像に接する機会が多い。とくに、有名な作は鎌倉期の東大寺南大門、興福寺の金剛力士立像で、解剖学的造形を窺い知るが、ヨーロッパの彫刻作品には到底及ばない。

ヨーロッパの芸術に関する自然主義は十三世紀に萌芽し、十五世紀には daVinci, Dürer, Michelangelo, Raphael らが登場し、自ら解剖力を執り、解剖人体の描写図を遺した。中でも da Vinci の解剖図は著名である。

わが国で、芸術分野への解剖学の導入は、明治初期に入ってからである。

(1)明治九年、工部大学校附属美術学校創設、画学科主任 Acckile san Giovanni の要請により東京医学校の玉越興平が週二回美術のための解剖学を講義し、猿の解剖もしたという（東京美術学校の歴史）。

(2)明治二十年、東京彫工会主催で、帝国大学医科大学田口和美教授が、才技育成のため「美術応用解剖学」の題で講演を行った。

(3)日本における芸術用の解剖書の始めは『美術応用解剖学』（明二五）で、本書は田口和美の長男茂一郎撰、田口和美校、また発行者は田口碩臣（和美の二男、のち千葉医学専門学校教授）である。大版（三五×二五糎）で本文四十頁、附図十五、F. Brinkley（海軍省御雇英人）が英文の序文を寄せている。凡例中「附図は獨国伯林美術大学校教授邊蘆華留博士の撰擇せしものに據ると雖とも碩学阿児敏博士の書に就て之を改訂――更に新製の数図を加へ畫工近藤勝美氏之を描写せり」とある。本書の続刊は不詳、稀覯本で国立国会図書館に所蔵されている。

(4)森鷗外と美術解剖講義

『鷗外日記』より抽出すると、「明治二十四年二月十四日東京美術学校解剖授業を嘱託せらる。同二十八年七月九日美術学校解剖授業を解嘱せらる（注、日清戦役出征のため）。

同三十一年一月七日午後久米桂一郎草する所の芸用解剖学の緒言を閲す。同年一月二十七日芸用解剖学の緒言を閲して、再生時代解剖家の傳を補う。同年二月十三日久米の芸用解剖学緒言。同年七月六日美術学校報酬年額五百圓を受くることとなす。同年九月四日芸用解剖学を校す。同年九月十三日此日より美術学校の講義二時間づつとなりぬ。同三十二年六月十四日美術学校の授業を解嘱せらる、慰労金百圓を贈らる。明治三十四年十月十九日大村画報社の将に芸用解剖学骨部と西洋芸術史上代の部とを発兌せんとするを告ぐ、校合等いかがあらん、心もとなし。同年十一月四日久米佳一郎解剖学の試刷紙を寄示す、以下復た贅せず。」とある。

鷗外は東京美術学校二代校長岡倉覚三の懇請により「美術解剖」講義を始めた。この科目は、東京美術学校規則（明二一）の絵画科、彫刻科第一年（毎週二時）に登場し、最初は後藤貞行（楠公像の馬の木型制作者）が担当し、後任は鷗外である。鷗外の講義録は遺されており「芸用解體学」、「美術解剖学」の表題が用いられている。明治三十六年久米佳一郎（洋画家、白馬会）と同選として『芸用解剖学・骨論部』を公刊した。本書の沿革史末尾に“J. Kollman, Plastische Anatomie 1886”を粉本としたことを記している。演者の示す本書は六版（大三）である。東京美術学校では鷗外についで久米が美術解剖の教科を担当した。

(5)京都美術学校では、明治二十五年の教則によれば、絵画科において第三、四、五年に毎週二時（四、五年次は一時）、「美術解剖」（人体及動物ノ筋肉骨骼等美術ニ関スル解剖ノ大略ヲ講授）を教科としているが、初講年及その担当者は調査の結果、不明であるが、『百年史京都市立芸術大学』では、明治二十九年四月小島光真（教諭）が明治三十三年三月までこの教科を担当しており、ついで宮島幹之助（明三十三年十月～三十五年九月）、つづく担当者は不明、明治四十一年四月より大正十年一月（死去）まで鈴木文太郎、ついで望月周三郎となっている。鈴木は蔵田貞造と合著で『美術解剖学』を公刊（明治四一）、これを教材としたのだろう。本書は本文百頁（附録）、図五七を収載している。

(6)斯界の著書として、前期以外のものをあげるとつぎのようである。

瀬戸近著『芸用解剖』（明四一）、桜井恒次郎著『美術解

剖学ノ栞』（大二）、川村多實二著『芸用解剖学』（大二）、
中村不折著『芸術解剖学』（大四）

（金沢医科大学）

18　熱中症予防薬と食塩

三浦豊彦

日本の夏は高温、高湿で熱帯のような気候である。そこで昔から炎天下の農業労働とか炉前の作業とかは耐え難い暑さだった。こうした暑熱による健康影響を徳川時代には暑気あたりとか、中暑とかよんだ。中暑とは「暑さに中り昏倒するなり」と書かれている。

一七八九（寛政元）年刊の多紀元徳（もとのり）著の『廣恵済急方』上巻の療法を一例としてみると、急いで日陰にねせて、道傍の熱土塊を掘りくだいて病人がのむか、又は臍の上に積みおき、その最中に窩をつくって、そのなかに他人に多く小便をさせて熱気を透させるなどと書いてある。但し実際にこんな療法が用いられたかどうかは知らない。服薬としては大蒜、生姜があげてある。